

行動の概念の検討

—メルロ＝ポンティの構造の哲学—

野村直正

メルロ＝ポンティの哲学的探究について語る時、我々がまず注目するのは『知覚の現象学』⁽¹⁾であり、この書は、彼の主著として、彼の思索の過程を追う時、常に参照され、標準とされるべき書であるということは、ことさら述べるまでもないことである。この書は、その分析の豊かさによって、様々な学的態度の根底に潜む、我々と諸物との近さ、世界におけるいわば有機的な関係を我々に見えるようにした。しかし、『知覚の現象学』への注目は、彼が生涯追い続けた問いへの全体的な注目と同時になされねばならない。『知覚の現象学』が、一つの標準として、彼のその他の著作に光を投げかけるというのは確かなことである。しかし、『知覚の現象学』が彼の問い続けた事柄の内に正しく位置づけられるのは、この書が引き継いだ問い、及びこの書が後に呼び起こした問いとの連関の内、すなわち、問いの歩みの内で正しく解釈し直されることによってでしかない。

以下、小論においては、メルロ＝ポンティの哲学的探究の出発点となる『行動の構造』⁽²⁾における「行動 (comportement)」の概念—そして、その理解の鍵となる「構造 (structure)」の概念—の検討を通して、彼の哲学的問いの根本的な意味を明らかにすることを試みる。

I. ゲシュタルト (Gestalt, forme)

1) 持続的な問い

メルロ＝ポンティの問いのまなざしは、終始、實在論的観点と観念論的観点とが絡まり合う我々の経験の両義的構造へと注がれる。「知覚についてのあらゆる理論は周知の矛盾を乗り越えようとしている。この矛盾とは、一方では、意識は身体の機能であり、従ってそれは或る外的な出来事に依存する<内的>な出来事であるが、他方では、それらの外的な出来事それ自身は意識によってしか認識されない、という矛盾である。換言すれば、意識は一方では世界の部分として現われるが、他方では世界と同じ広がりを持つものとして現われるのである」(S. C. 232)。この指摘は、實在的な過程の内に取り込まれた意識とあらゆる事象を自己の観点の下に総合する普遍的な場としての意識、という我々の経験の両義的な性格を端的に言い表わしている。確かに、我々がこれらの見解の一方を断固として主張し得るならば、以上のような両義性は単なる見せかけとして解消されることはいうまでもない。しかし、このような主張は、我々の経験の一つの説明ではあり得ても、我々の経験を相互外的な物の過程、或いは普遍的意識のまなざしの下で透明となった観念へと一

拳に転じてしまい、正にこのことによって、我々の経験を損ない、具体的な経験の了解を不可能なものにしてしまうであろう。具体的な経験をその独自性において理解しようとする時、世界の経験が我々に提示する問題は、我々の経験が、物の存在或いは意識の存在という二元論的な存在概念によっては理解され得ないということ、しかも、このことが、我々の経験の有する二元性そのものから問題となるということである。

2) ゲシュタルト

メルロ＝ポンティの最初の著作『行動の構造』は、生理学、心理学等、行動に関する科学的探究と歩みを共にしつつ、その再検討を通して「行動」の概念の持つ哲学的意義を明らかにする試みと捉えることができる。その際、行動の研究は、条件反射といわれるようないわば原初的な反応から我々の心的な行為を含めた広い範囲に渡って考察されるが、彼の主要関心は、高次の行動、すなわち我々の行動の理解に向けられているということ、いうまでもない。というのも、主要な問題は、先に述べた我々の経験の了解に他ならないのだから。

メルロ＝ポンティは、これらの諸行動を一つの統合的な観点の下で捉え直すことを試みるが、その際、彼はゲシュタルト心理学が見出した「ゲシュタルト（形態）」という概念に注目する。ゲシュタルトとは、諸部分の総和には還元され得ない独自の性格を有する全体と規定することができるが、より積極的に言うならば、それは、諸契機を自己の内に統合し、一つの内的連関の内に諸契機を在らしめるダイナミックな統合の過程と規定することができる⁽³⁾。

この学説は、周知のごとく、心理学における要素的、原子論的な思考に対する批判として、すなわち、要素的、モザイク的な「感覚」概念から出発しその集合或いは連合によって知覚を構成しようとする古典の心理学に対する批判として登場する。知覚の場面から具体的な例を挙げれば、色の対比や幾何学的錯視等を挙げることができるが、これらの事象は、それぞれ、いわゆる局所感覚によっては説明し得ない視野独自の内的機能を示している。知覚の場面で或る色が規定される場合、この色の規定は、局所的な感覚として規定されるのではなく、常に周囲の色との差異の内ではしか規定され得ない。ここで見られるのは、あらかじめ規定された個々の色から色の全体的な配置が規定されるというのではなく、逆に、色の全体的な布置（constellation）ということから、そこに生じている差異によって個々の色が規定されるという事態である。例えばバランスの取れた色の全体が、そこに或る別の色の契機が加わると、視野そのものの内で色彩の再分配が起り、一挙に全体的な色調を変え、新たな色の平衡状態が引き起こされる。こういった事象は、メロディーや表情の持つ分割し得ない性質として、形態質（ゲシュタルト性質）という名で呼ばれるものであるが、これらは共に、局所感覚の理論によっては捉え得ないそれ自身の内的な法則を持つ現象である⁽⁴⁾。換言すれば、この形態質と呼ばれるものこそが、直接的な所与として認められねばならないのである。

ゲシュタルトの諸契機は、独立した部分として存するのではなく、ゲシュタルトという全体的連関の内にしか存しないが故に、この連関の外ではいかなる規定をも受けることはできない。すなわち、ゲシュタルトとは、或る独立自存者が或る関係の内に後から加わっ

てくるというのではなく、関係項が関係そのものから或る差異として現われ、その規定を⁽¹⁵⁾全体的な関係そのものから受けとるという事態を言い表わしているのである。

3) 行動

メルロ＝ポンティは、生体の解剖学的機構から出発し行動を局所的反射の総和によって説明しようとする学説に対し、行動をゲシュタルトと規定し、行動の本質を、有機体とその環境との弁証法的関係の内に捉える。行動が一つのゲシュタルト、構造をなすという時、このことは、行動が環境の働きかけにも有機体の内的作用にも還元され得ないということ、すなわち、有機体の存在及びそれが属する環境は、両者の内的な連関の内ではしか捉え得ないということを意味する。今、例として興奮 (excitation) という現象を取り上げることとする。古典的な解釈に従うならば、興奮というのは、或る物理的・化学的な刺激を原因として有機体の内に引き起こされる機械的・生理的な結果と規定されるであろう。この場合、解剖学的な考え方に則って、刺激－反応という直線的な因果系列の内では生体が考察されている。また、このことは、同時に、実験室で観察されるような反応を、そのまま生体の本来の行動の要素として解釈するところから成立する。しかし、実際には、実験室の状況においてさへ一義的な反応を得られるということは極く稀にしかないとことが知られている。有機体がどのような反応をもって刺激に答えるかは、その時々「有機体の全体的な状況」(例えば、その時々⁽⁶⁾の姿勢)や先行する興奮、また内分泌の平衡状態との関係によってしか決定され得ないのである。⁽⁷⁾

さて、実験室においてさて事情は以上の如くであるが、自然的な行動が問題となる時に明らかとなるように、有機体は環境のすべての物理的・化学的刺激に反応するのではなく、そこには常に有機体に独自の選択とでも言うべきものが存する。そして、このことによって、有機体は自己の環境を形成しているのである。興奮といったいわば初発的な現象においても、そこに見られるのは刺激－反応という直線的な原因－結果の関係ではなく、興奮は、有機体が自己の環境を形成しそれに向かうその時々⁽⁶⁾の有り方、内的な可能性を外部へと示すことによって、有機体の存在そのものを現わしている。有機体は、物理的・化学的な刺激に機械的に反応するのではなく、「刺激の介入は、その刺激がその有機体に独自の活動性に対して有する意味と価値とに応じてなされる」(S. C. 139) のである。このことがいわんとするのは、刺激を有機体の活動から独立させてそれ自身で規定することはできないということである。刺激が刺激として存し得るのは、有機体がそれにいかに答えるかという有機体に固有な行動との関係においてのみである。すなわち、行動の構造において、刺激は、もはや物理的な事象としてではなく、生物学的な事象としてのみ完全な意味で刺激として規定され得るのである。刺激と反応とは、それぞれが行動という構造に与かることによって内的に結びつき相互に規定し合う。これらは、原因－結果の直線的な関係としてではなく、「一つの循環過程の二契機 (deux moments d'un processus circulaire)」として捉えられるのである。

4) 物質 (matière), 生命 (vie), 精神 (esprit)

行動が構造として存するということは、行動がそれ自身の内的な規範 (morme) によってのみ捉えられるということ、従って行動の有する秩序は物理的な契機によっては捉

え得ないということを意味する。メルロ＝ポンティは、ゲシュタルトの観点から、物質、生命、精神を、それぞれ実体としてではなく構造として異なる三つの秩序として捉える。この三つの秩序は、物理的秩序、生命的秩序、人間的秩序ということになるが、ここで、それらの秩序について簡略に述べておきたい。

a) 物理的秩序

物理的事象が構造をなすということは、例えば伝導体の電流の布置や水滴が大気圧の下に取る形状、また、天体の秩序等々において見られる。これらの事象に共通するのは、それぞれの部分（契機）が、それ自体で規定されるのではなく、全体の形状或いは秩序から初めて規定されるということである。メルロ＝ポンティはシャボン玉を例にとって、「その各点に起こることは他のあらゆる点に起こっていることによって決定される」（S. C. 141-142）と述べている。「これらの系（＝物理的系）の内的統一において、各々の局所的な結果は、それが全体の内で果たす機能やその系が実現しようとしている構造に対する価値や意義に依存するといえる」（S. C. 142）。ここに見られるのは、先に述べた「循環的な因果性」、すなわち、様々な外的な影響に対して、その独自の内的統一によって答えるダイナミックな過程である。

b) 生命的秩序

次に、生命の秩序は、既に述べたように、有機体とその環境との間の弁証法的関係として、物理的構造を越える新たな構造として捉えられる。生命的な行動が、独自の内的統一を有する構造として存するということは、ここには、既に、物理的・化学的な法則では捉え得ない独自の自律性が存するということを意味する。確かに、生命の物質的基盤というのが認められねばならないであろう。しかし、生命が登場するということは、そこに全く新たな諸関係が生ずるということに他ならず、この諸関係は、新たな生命的意味の内で構造化され、また更新されていくものである。すなわち、物質的なものが生命を規定するどころか、今度は逆に、物質的なものが生命の秩序の内に統合し直され、その構造の内で新たな意味づけを受けるということになる。従って、新たな構造としての生命の秩序は、その構造の内でしか捉え得ないのである。

c) 人間的秩序

最後に、人間的秩序は、文化や歴史性において捉えられる精神的行動の秩序ということができる。精神的な諸構造は、生命的な諸構造を土台とはしながらも、それを越える新たな構造連関として捉えられることとなる。生命的な秩序においては、その構造は、有機体とその環境の働きかけに応じその都度新たな平衡状態を獲得し、その種にいわば特権的な諸環境を選びとり保持するということに認められるが、人間的秩序においては、環境から直接的に要請されるのではない諸目的への志向によって、自己の構造を更新していくという、構造の自由性が認められる。このことは、労働や道具の製作等、潜在的可能的な諸目標への志向や、様々な事象に対して異なる観点を取る能力において顕著に認められる。人間的行動においては、自己の環境に対して或る距離を取り、環境全体を越えたところに平衡を求める能力が認められるのである。ここにまた、対象化の能力も生まれ、シンボリックな諸形態が登場することとなる。

以上、物質、生命、精神という三つの異なる構造を簡略に見てきたが、これらの秩序は、それぞれ独自の内的統一を有し、その独自の構造においてしか捉え得ないが故に、それぞれ他に還元不可能であるといわねばならない。「物質、生命、精神は異なった仕方で形態の本性に与かっており、統合の異なった程度をあらわしている。そしてそれらは、個性性の実現が常に高められていくような階層を構成している」(S. C. 143)のである。生命の秩序、精神の秩序といった上級の秩序が存するのは、それぞれ下級の秩序を基礎としてのことではあるが、この両者の関係は、切れ目のない連続的な関係としてではなく、非連続性をはらむ構造的差異によって捉えられる。それぞれの秩序は、「外的影響に対する自律性」、「環境の物理的条件に対する自律性」、「生理的下部構造に対する自律性」(S. C. 143)によって特徴づけることができるが、既に述べられたように、生命的秩序においては、物理的な契機は有機体とその環境との相互依存的な関係の内に統合し直され、また、精神的秩序においては、性や欲望等いわゆる本能的なものは文化的歴史的な構造の内に統合し直され、その構造の内で新たな規定性を受けることとなる。これらの秩序の間の関係は、派生や因果の関係ではなく、「新たな構造化」として理解されねばならない。メルロ＝ポンティは、この関係を、「上級のもの (le supérieur) を下級のもの (l'inférieur) から解放すると同時に、上級の下級の下級のものに《基づける》」(S. C. 199)という二重の関係において捉えている。しかし、また、これらの関係が、正に構造的な差異として捉えられるが故に、それぞれの秩序はその独自の内的統一の形式によってしか捉え得ないのである。

Ⅱ. ゲシュタルトの存在の問題

1) ゲシュタルト心理学批判

我々は、メルロ＝ポンティのゲシュタルトへの注目を、常に、ゲシュタルト心理学の学説から切り離して考える必要がある。一言でいえば、メルロ＝ポンティは、ゲシュタルト心理学の学説に対し常に肯定と否定とをもって臨んでいる。肯定の側面はゲシュタルトという全体的な構造の発見と具体的な構造の記述であり、否定の側面は、ゲシュタルトの実在論的な存在解釈である。

先に述べた物質、生命、精神という三つの秩序は、ゲシュタルトの根本的な性格が堅持される限り、それぞれ他に通約不可能な構造として考察されねばならない。上級の秩序が下級の秩序を越えている限り、物質の秩序と同じ意義をもつ生命の秩序を考えたり、生命の秩序と等価な精神の秩序を考えたりすることは、ゲシュタルトの定義からして不可能である。ゲシュタルトが諸要素の総和には還元し得ない全体であるということは、一つの構造内においてだけでなく、構造と構造との関係においても堅持されねばならない。というのも、上級の秩序の出現は、その統合の程度が完全であればある程、下級の秩序からその自律性を奪い、自己の構造の内で下級の秩序に新たな意味づけを与えるのであるから。従って、構造の哲学から排除されねばならないのは、実体の哲学及び要素的因果的な思考法一般ということになる。

ところで、ゲシュタルトの学説が、暗黙の実在論的存在理解の内で陥るのは、この要素

的因果的な思考に他ならない。ゲシュタルトの学説は、諸現象を解釈する段階になると、物理的世界にも既に構造が存するということから、諸現象を物理的ゲシュタルトによって説明するという還元的な思考へと舞い戻ってしまうのである。このことは「同形説 (isomorphisme)」の理論に顕著にうかがわれる。この説は、一言でいえば、生命的現象及び意識現象を大脳内の構造的な過程との対応によって説明しようとするものである⁽⁹⁾。この説は、すべての生命的意識的な事象が、物理化学的な事象の用語によって理解されるところに成立するのである。

しかし、もしこのように捉えてしまうならば、つまり、生命的更には精神的秩序が物理的秩序によって理解され得るとするならば、このことは、物理的秩序、生命的秩序、精神的秩序の間にはもはや根本的な意味での構造的な差異がないということ、すなわち、物理的ゲシュタルトしか存在しないということになってしまうのではないだろうか。

ゲシュタルトをその根本性格によって捉えるならば、それぞれの秩序は、それぞれ独自の構造として、その構造の内的統一においてしか理解され得ない。生命的構造や精神的構造を物理的構造から説明するという試みは、これら三つの秩序の独自性を捉え損なうことによって構造的な思惟そのものを破壊してしまうのである。ゲシュタルトの独自性が堅持されるならば、ゲシュタルトは、もはや、物理的世界の内に位置づけられるような自然の出来事の一つとしては捉え得ない。ゲシュタルトの概念は、既に、「実在の総体 (omnitude realitatis) としての物理的世界」(S. C. 144) の概念を越えているのである。

2) ゲシュタルトの理念性 (idéalité)

メルロ＝ポンティは、ゲシュタルトの実在論的存在解釈に対し、構造は「自然」の「なか」にあるのではなく、構造は意識にとって存在するという見解を示す。このことは、まず第一に、ゲシュタルトは物理的な実在としては捉え得ず、既に、或る理念性を与えられているということの意味する。つまり、このことは、ゲシュタルトが或る視点の下で与えられるということであり、ここに、批判主義的発想による超越論的な契機が介入してくるということができる。そして、確かに、メルロ＝ポンティが導き出す最初の結論は超越論的態度への移行と呼ばれるものではある。しかし、ここで注意されねばならないのは、彼自身が述べているように、「この最初の結論は、批判主義的発想の哲学とは単なる同音異義の関係にある」(S. C. 222-223) ということである。

構造の有する意味は、構造化のダイナミックな過程において、すなわち、その諸契機の内的な展開においてしか明らかにされ得ない。「諸契機を自己の内に統合している全体」という定義は、或る理念性の下でしか捉え得ないということではできであろう。しかし、この理念性は、構造的な布置そのものの内ではいわば土着的に生まれてくる理念性であるが故に、意識が与える意味ではないのである。ここに、構造が純粋な観念とは決してなり得ない深い根柢がある。構造は、純粋な外在性としての物ではないのもちろんであるが、それはまた、純粋な内在性としての観念でもないものであり、ここに、構造が知性にとって不透明なままに留まっている理由があるのである。構造の理解において根本的に重要となるのは、構造を、「理念と現実存在とが区別し得ない合体」(S. C. 223) として、また、素材の配置そのものから「生まれ出ずる可知性」(S. C. 223) として理解するというこ

である。我々は、このような意味で、構造はアプリアリな形式と経験内容との区別を根本から越えているといえることができる。ここで問題となっているのは、内容そのものが有する形式、現実存在そのものが有する理念性であり、換言すれば、「内容そのものの論理」である。構造の理解は、新たな知の形態を呼び起こしているのである。

従って、「構造が意識にとって存在する」ということは、構造が純粋意識の内面性へと還元されるということとは全く別のことであるといわねばならない。構造が、「理念と現実存在とが区別し難い合体」において理解されねばならないということ、このことが、構造の純粋な外在性への還元と共に、純粋な内在性への還帰を不可能にしているのである。

ゲシュタルトが属するのは、物理的世界という唯一の世界でもなく、純粋な意識の内在的領域でもない。我々はただ、「ゲシュタルトの世界という一つの世界 (univers)」(S. C. 144) が在するといえるのみである。しかし、また、このゲシュタルトの世界というのは、我々の行動が属する世界に他ならない。すなわち、ゲシュタルトが存するのは、諸行動の場としてのこの知覚世界なのであり、「それにとってゲシュタルトが存在するところの意識」(S. C. 227) とは、結局のところ、我々が現実存在と根源的に交わる場としての知覚経験に他ならないのである。

ゲシュタルトが何で在るかは、様々なゲシュタルトが現われ出ている知覚世界においてしか理解され得ない。ゲシュタルトが存するのは、現実存在との交わるの場としての知覚経験においてであり、ここに、知覚経験が世界の構造を問うにあたり、徹底的に問われるべき問題として浮かび上がるのである。

Ⅲ．知覚世界（行動的世界）の問題

1) 知覚意識の問題

先に、構造を「意識の対象」とする観点について述べたが、我々は、ここで、メルロ＝ポンティにおける意識の概念の独自性、更には問題性に注意しなければならない。

まず、構造が意識にとって存在するということとは、構造が意識の前に提示されるということとは区別されねばならない。というのも、行動の分析が提示する意識の問題は、行動の構造の内に巻き込まれ、その契機をなす意識の問題、すなわち知覚意識の問題に他ならないからである。ここで問われる意識は、認識を本質とする存在としての意識ではなく、世界に内属し (être au monde)、実存する或る仕方としての意識である。我々は、このような意識を、世界を前にした意識ではなく、世界に到来する意識ということもできるであろう。行動の構造の問題は、同時に、我々の世界の構造の問題であり、この問題は、どのような形であれ、この構造に外的な観点からは決して捉え得ない問題である。知的意識もまた、我々の行動の一つの形態に他ならないのである。

我々の行動の構造においては、構造の変化は意識の形態の変化と一体となっている。このことは、例えば、幼児の世界の構造や精神分裂者の世界の構造等の問題においてうかがわれる。行動の構造に応じて、意識には様々な形態が見出せるということ、このことが、意識を知的表象的意識に還元することを不可能にしているものであり、また、意識の両義性をなしているものでもある。我々は、欲望や愛や認識等、様々な仕方で世界へと向かう

訳であるが、これら意識の形態の内に、文化の諸形態すなわち世界の諸形態が現われている。世界を様々な行動の場、志向の場として構造的に把握するならば、世界は、そこに属するものの様々な行動や志向に応じて、その独自の構造を我々に提示することとなる。しかし、そうであるなら尚更、我々の世界経験は、認識という一つの志向の下には包摂され得なくなるのである。

我々は物理的自然の中に生まれるのではなく、人間的文化的世界に生まれる。知覚の記述的な諸性格を考察するならば、そこに見られるのは純粋な自然物や純粋な質の知覚ではなく、人間的意図と共にある現実への参与としての知覚である。例えば、幼児の関心がまず顔や動作に集中されるということが知られている。幼児にとって、また我々にとっても、顔や動作は、そのまま或る表情として世界の内に存している。微笑が微笑として存するのは、それが、その表情によって、そのまま母親なりの心として幼児の世界に存するからに他ならない。また、幼児が微笑をもって答えるのも、彼が自分の世界で出会う或る表情に対してであり、幼児は、丸いものや二つの点に対しても、その表情に対して、微笑をもって答えるのである。母親の表情や事物の有する表情は、そのまま現実として幼児の世界に存し、そこに幼児の意識の構造、つまり幼児の世界が見えるのである。現実を生きる意識の形態には様々な在り方があるということ、このことが、また、世界の構造の多重性及び歴史性を構成しているということもできるであろう。

意識の構造の問題に関し、メルロ＝ポンティは、一つの例として、フットボールの競技者とグラウンドとの関係を、競技者の一挙手一動とそれと共に様々な力線をはらみ、競技者の志向そのものがそこに現われるような空間との関係の内に捉えている。ここに見られるのは、「意識がこの環境に住みつく」という以上のことであり、「意識とは、この瞬間、環境と行為との弁証法以外の何ものでもない」(S. C. 183)。また、物の経験について考えてみても、我々は、様々な射映を総合して一つの物についての概念を得るのではないであろう。我々は、或るパースペクティブと他のパースペクティブをそれぞれ別に所有し、その総合によって物の理解が生じる訳ではない。我々は一つのパースペクティブから他のパースペクティブへと全体的に移り行くのであり、我々自身がこの全体的な移り行きそのものに属している以上、我々が物を物として経験するのは、あくまでもこのような全体的な移り行きの構造の内ではかないのである。

意識は、或る観点から連続的に捉えられる確固たる構造としてではなく、様々な非連続性をはらむ構造的な高まりの内で、すなわち、行動的世界の構造的な高まりの内で理解されねばならないと思われる。意識の形態は、決して表象的意識につくされることはない。具体的な知覚意識の問題が提示するのは、むしろ、意識そのものの歴史性、意識の身体的な基盤の問題である。そして、メルロ＝ポンティの最終的な目論みは、意識の原初的な形態からの構造的な高まりの内で、相互主観的な意識の形態へと進んでいくということ、しかも、これを、世界の構造的な高まりの内で規定するということなのである。

2) 心と身体との関係の問題

意識及びそれが属する世界を以上のように行動と一体となった構造的な高まりにおいて捉える時、身体はもはや心に外的なものとしては捉え得ず、心と身体との関係は、行動の

構造の内ではしか理解され得ないということになる。また、意識の形態が一つの形態につくせないと同様に、実体的思惟にかわる構造的思惟が堅持される限り、身体の形態も一つの形態にはつくせないということになる。既に述べたように、高位の構造が下位の構造を越え、自己の構造の内では新たな統合がなされる限り、下位の構造はその自律性を失ない、高位の構造の内では新たな規定を受けることとなる。つまり、この時には、動物の身体と人間の身体とは同じレベルで語ることはできなくなる訳であり、また、尚更、人間の行動を解剖学的な知見から理解するということは不可能となる。というのも、我々の心的な行為は身体と一体となっているからであり、ここに、心身の実体的な分離が不可能となる根本的な事態がうかがわれる。我々が精神的な仕事に没入している時、例えば一心に物を書いている時、身体は、その呼吸や姿勢も含め、思惟の働きへと共働しており、思惟の構造そのものの内で心と一体となっていることができる。この場合、身体は決して自由に動かせる物なのではなく、我々の思惟そのものが実現される場となっている。この場合思惟という構造において、身体は精神的な働きの内に統合されているのであり、我々の身体は決して「心の道具」とはならないのである。

しかし、他方、我々が疲れたり眠くなったりして、精神的な行為がもはや続行され得ないという事態もしばしば起こり、ここに、心身分離についての一つの真理があるということができると思われる。しかし、このことは、身体が心に実体的に作用するというのではなく、一つの構造としての心的な働きが身体的な契機によってその統合をさまたげられ、下位の弁証法に身を譲るということとして捉えられる。すなわち、心と身体との関係は、行動の統合度の違いとして捉えられ、心身の二元性は、いうなれば構造間の往復関係の内では捉えられるのである。「しかし、この二元性は実体の二元性ではない。換言すれば、心と身体概念は相対化されねばならない。相互に作用し合う化学的複合物の塊としての身体、生けるものとその生物学的環境との弁証法としての身体、また、社会的主体とその集団との弁証法としての身体が在り、更に、我々のすべての習慣でさえ、各々の瞬間の私には感知され得ない身体なのである。これらの諸段階の各々は、前段階のものに対しては心であり、次の段階のものに対しては身体である。身体一般とは、既に辿られた道の全体、既に構成された能力の全体、またそれに基づいてより高次の形態化がなされる既得の弁証法的地盤であり、心とは、そこから確立される意味なのである。」(S. C. 227)。

我々が最初に述べた意識の両義性の問題は、物でも観念でもない行動の概念によって、構造間の関係としての新たな両義性の問題へと展開される。そこに見られるのは、世界の構造と一体となった意識の歴史性の問題であり、次の著作(『知覚の現象学』)は、知覚経験の唯中に身を置き、この基づけるものと基づけられるものとの二重の関係を、生きられるものと認識されるもの、反省されないものと反省との二重の関係の内では捉え直すことを目指すのである。

結 び

『行動の構造』を引き継ぐ『知覚の現象学』は、『行動の構造』で見出された知覚世界の構造の問題によって理解されねばならない。メルロ＝ポンティの関心を引きつけたのは、

現象学の持つ形相学としての性格ではなく、受動性や身体性の問題が登場するフッサール後期に属する生活世界 (Lebenswelt) の諸問題である。メルロ＝ポンティは、『行動の構造』で見出した諸行動の属する世界の問題とフッサールの生活世界の問題との結びつきの上に、現象学の方法を、彼独自の方法として取り入れるのである。

彼の持続的な問いの目標は、様々な行動と共に一定の構造を有している我々の経験と共に在る世界であり、この状況は、「世界に内属する存在 (être au monde)」という表現に縮約的に見てとることができる。『知覚の現象学』で重要な位置を占める身体分析は、世界の構造と一体となった主体の分析であり、メルロ＝ポンティの最終的な意図は、感覚的世界と知的世界との関係を、我々の経験の構造の高まりの内て根本から規定し直すところにある。しかし、この問いは、飽くまでも、我々の経験の構造の内てしかなされ得ない問いである。問いかけるものがその問い自身に巻き込まれているという状況、この状況が、問いの根源へと我々を常に送り返すこととなるのである。

[哲学 博士課程三回生]

— 註 —

- (1) Phénoménologie de la perception, 1945
- (2) La structure du comportement, 1942 (本文の引用は S. C. と略記)
- (3) ゲシュタルトの学説の核は、「全体は部分の総和とは異なる」というところにある。しかし、我々は、更に、或る独立的なものを思い起こさせる「部分」という表現の問題性を理解しなければならないであろう。ゲシュタルトの諸契機は、ただ単に、全体的構造からその規定性を負っているだけではなう、その存在もまた構造からしか規定され得ないのである。ここに、構造の哲学が実体の哲学を徹底的に越える深い根拠がある。
- (4) この形態質と呼ばれる所与の根本的特性が、様々な表現間の「移調可能性」を基礎づけていると言うことができるであろう。
- (5) 我々は、後期メルロ＝ポンティのリキュールへの注目を、彼の構造的思惟に内在的な要請として理解することもできるであろう。
- (6) 実験室の状況は生体にとって極めて特異な状況であるということが理解されねばならない。
- (7) これらの事実は、神経系そのものをゲシュタルトの概念によって解釈する必要性を示唆している。
- (8) この顕著な例として、革命や自殺行為を挙げることができる。
- (9) 例えば「地の上の図」という知覚構造は脳内の電気的過程の配置によって説明されている。(c. f. W. Köhler, Gestalt Psychology)
- (10) 我々はメルロ＝ポンティの構造的思惟における意識の問題性に充分注意しなければならない。その問題性とは、構造の哲学と意識の哲学とは原理的に相い容れない関係にあるということである。構造は決して意識の前に在るのではない。ここに、メルロ＝ポンティに、『見えるものと見えないもの』(Le visible et l'invisible, 1964)において、存在論の観点から『知覚の現象学』の志向的分析を徹底的に捉え直さねばならなくさせた、構造的思惟そのものに内在する存在論的要請を見ることができる。

Une considération sur la notion de comportement
— La philosophie de la structure chez M. Merleau-Ponty —

par Naomasa Nomura

Le premier livre de Merleau-Ponty, "La structure du comportement", bien qu'on le mentionne moins, contient beaucoup de problèmes importants. Dans ce livre, il a établi le champ de sa recherche, et dans ses livres suivants il continue de le reprendre et le repenser. Son point de départ est de "comprendre les rapports de la conscience et de la nature". En d'autres termes, c'est de rechercher le troisième chemin entre la philosophie qui part de l'être de conscience et celle qui part de l'être de chose, en dépassant l'antinomie de l'ontologie traditionnelle.

Dans ce livre, il examine des comportements, inspiré par la notion de la forme (la structure). La forme, c'est l'ensemble qui intègre tous ses moments dans une relation interne et qui, donc, ne peut jamais être expliqué par la somme de ses parties. Par exemple, en l'égard du comportement, on ne peut comprendre l'être de l'organisme et son milieu que dans leur relation intime, puisque chacun des deux est impliqué dans une structuration, et que, pour cela, il ne peut recevoir ses déterminations que par l'autre. On peut dire qu'ils sont deux moments d'un processus circulaire.

Considéré du point de vue de la structure, le problème de la conscience est celui de la conscience qui, elle-même, est impliquée dans la structure du comportement et qui s'en fait un moment (la conscience perceptive). Le changement de la structure du monde ne fait qu'un avec celui de la structure de la conscience. Qu'il y ait beaucoup de manières d'être au monde et d'exister, cela, par là même, signifie une impossibilité de la réduire à la conscience représentative ou intellectuelle, et constitue la multiplicité et l'historicité de notre monde.

Le problème de la structure, qui n'est donc "ni chose ni idée", exige la refonte des notions ontologique. Merleau-Ponty, lui-même, a dû, sans cesse, le reprendre et le repenser. Il n'a pas pu l'achever. Le problème de l'être de la structure reste ouvert pour nous.